

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第103号 2024年(令和6年)12月3日発行

すでにお知らせしておりますように、「西日本支部だより」は、第98号から電子媒体のみでの刊行となっております。必要におうじて印刷してごらんください。次回の例会案内については、東洋音楽学会ウェブサイトの西日本支部のページをご覧ください。

目次

1、新支部長ご挨拶	1頁
2、支部長退任にあたって	2頁
3、定例研究会の記録	
第299回、300回	3頁
4、定例研究会案内	8頁
お知らせ	8頁

1、新支部長ご挨拶

福岡正太

前支部長の藤田さんを始めとする前支部委員・参事の皆さま、どうもご苦労さまでした。新しい西日本支部委員会が、以下のメンバーで発足いたしました。引き続き、委員をお願いしている方も多いですが、どうぞよろしく願いいたします。

支部担当理事：福岡正太（支部長）、福岡まどか（支部会計）

支部委員：大久保真利子、斎藤桂、島添貴美子、菌田郁、米山知子、劉麟玉

支部参事：志川真子

とは言っても、この形で支部委員会が活動するのは1年足らずとなります。先日の定時社員総会にて定款施行細則が改正され、来年度（2025年9月1日～）から支部が廃止されることになりました。学会の日常的な研究発表の場である定例研究会（例会）は、これまで支部単位で開催されてきましたが（詳細は今号に掲載されている前支部長の藤田さんの原稿をお読みください）、今後、例会をどのように企画・運営していくのか、告知や報告をどのようにおこなっていくのか、この期間に検討しなければなりません。

コロナ禍の間にオンラインでの集会在り前になり、東洋音楽学会でもオンラインやハイブリッドの大会や例会を経験しました。遠方の会員が比較的簡単に例会に参加できるようになったり、他支部の例会に参加しやすくなったことはオンラインの恩恵だと言えるでしょう。今回の支部廃止の決定も、そうした事情を踏まえてのことだと思われます。一方で、各支部が培ってきた、時には非会員も含めたそれぞれの地域におけるネットワークや例会運営のノウハウも、学会活動のためには重要です。

オンラインと対面の両方の良さを生かしながら、地域の特性を生かした活動と地域に縛られない活動のバランスをとって学会活動を活性化していく知恵が必要とされています。しばらく模索の時期が続くこととなります。望ましい例会運営の形に落ち着いていくまでには時間がかかることと思いますが、ぜひ、会員の皆さまの建設的なアイデアをお寄せいただければ幸いです。

どうぞよろしくお願いいたします。

2、支部長退任にあたって

藤田隆則

おもいかえせば、21世紀がはじまった頃である。そのときの会長は、塚田健一氏であった。塚田氏は、1999年に、ICTMの世界大会を広島市立大学で開催するなどの大きな仕事を残し、また、日本を代表する民族音楽学者として世界に知られていたが、そのヴァイタリティは、世界だけではなく、国内の本学会にも向けられた。

のちに本学会の会長にもなられた金城厚氏、当時理事を勤めておられた田井竜一氏、そして私藤田が、正確な名称は忘れてしまったが、学会の活性化のための改革案を考える会合を重ねる任をうけていた。改革案にはいろいろな項目があったと思うが（法人化も含めて）、大きな目玉のひとつが、東日本支部の設立だった。当時の東洋音楽学会は、関東に本部が存在し、関西を中心に関西支部というものが置かれ、沖縄には沖縄支部が置かれていた。そこに、東日本支部を誕生させ、現在の3支部制をとるかたちにするのが、塚田氏のアイデアであった。中央と地方という対立ではなく、どこも local である（なければならない）という思想の実現のための改革であったのである。

以前から支部であった西日本には、さほど影響はなかったが、東日本支部は、本部との棲み分けも必要であり、業務が二重になったことで、運営に大きな労力をかけることになったことが伺える。これから本学会も支部がなくなっていくという話を聞いたが、東日本支部の委員の皆様には、本当にお疲れ様でした、と言いたい。

そして西日本支部も近々なくなると聞く。私自身は、1997年ごろの入会以来、ずっと西日本支部の所属である。当時、活躍しておられた先生がたが、ひとり、ひとり、いなくなっている。この機会に、記憶だけを頼りに、昔話を記す。

関西の音楽学者に、相愛大学の馬淵卯三郎氏、関西学院大学の谷村晃氏、同じく相愛の酒井醇氏がおられた。この三氏は、東洋音楽学会の役員リストに「参与」という不思議な役名で、亡くなるまでずっと名前があげられていた（荒ぶる神として祀られていたかのようである）。三氏は、関西の職業的音楽学者の第1世代であり、小泉文夫氏や戸口幸策氏、皆川達夫氏らと同じく、昭和2年生まれ組である。もし存命ならば、ことし100歳を迎えることになる。まあ1960年代生まれの私から見れば、日本の音楽学を生み出した、やはり荒ぶる、国づくりの神々である。この方々の中でも、馬淵氏には個人的にお世話になった。よく、東京におられた平野健次氏（昭和4年生まれ）のことを「ど・ひらの」と呼んでおられた。他者を罵倒する際、かならず名前の最初の「ど」をつけて呼ばれる。大阪大学の山口修氏は、リエゾンして「どさむ」と呼んでおられた。毒舌に同感することもあり、辟易すること度々あり、思い出深い。が、「ど」というのは、「どアホ！」の「ど」でありつつも、フォンと同様の敬称 de、敬意を込めた罵倒であったということが、今になってわかるようになってきた。

藤井知昭氏にも、私は個人的にお世話になっている。氏によるメリアムの翻訳本は、当時大きな影響を与えた本であった。氏も第1世代の最後のあたりに位置して、関西の民族音楽学の底上げに大きく貢献された。

上の方々よりも世代はくだるが、2000年ごろに、西日本支部の例会をととても豊かに回しておられたので印象深かったのが、水野信男氏である。個人的には、学部時代に氏の『ユダヤ音楽史』を読み、民族音楽学者のひとつの姿を学ぶことになったという点で、私は大きな恩恵を受けた。水野氏が定例研究会を切り盛りしていたときには、ほとんどの例会が、伝統音楽の鑑賞とセットになっていた。よく覚えているのは、大阪の住吉大社のお田植え祭に合わせての例会、そして東本願寺の報恩講における坂東節に合わせての例会である。鑑賞をして、それに関連する研究発表を設定するというのは、たいへんな労力だったはずだが、見応え、聞き応えがあって、とてもよかった。水野氏が、積極的に芸能の鑑賞に出かけておられたのは、当時、氏が『邦楽ジャーナル』にコラムをもっておられ、毎月のように、記事を書かなければならない立場だったこともあったからであろう。とにかく、例会参加が、楽しみだったことを思い出す。氏の代表的な研究「ウンム・クルスム」が発表されたころ（2004年）には、西日本支部はより若い世代に引き継がれていき、氏の代表的な著作が西日本支部でとりあげられ、検討される機会もなくなっていた。

水野氏は、2000年ごろには国立民族学博物館で研究会をもっておられ、その成果は、共同研究の成果として出版されている。そこに参加しておられた、山口修氏も、そして大谷紀美子氏も亡くなられた。山口氏は、1980-90年代にかけて、西日本支部に「会報」なるものを導入された方である。アメリカ帰りの山口氏は、米国の学会が定期的に発行するnewsletterなるものを、日本の学会でも当たり前にした張本人である。われわれの情報共有を促進させることに貢献したが、われわれ委員をより忙しくさせてしまった責任者のひとりでもある。大谷氏は、支部の例会で、舞踊記譜法の連続講演会をするなど、長く貢献してこられた。

昭和2年生まれを職業音楽学者の第一世代とするならば、昭和10年代生まれの、水野氏、山口氏、大谷氏らは第2世代と言えるかもしれない。そういえば尺八研究の月溪恒子氏も西日本支部でご活躍だった。やはり昭和10年代生まれ、ここでいう第2世代である。

第3世代を考えようとするなら、戦後生まれになる。10年ごとに世代を切っていくなら、今は、第4世代とも第5世代ともなるであろう。しかしまだ、ここに記すには、十分に、過去としては熟しきれていない。

いずれにせよ、この第2世代が、西日本支部の頂点を作り上げてくださっていたと、私には感じられる。現在、職業音楽学者へのトラックという道筋が次第に見えなくなっていることもあって、東洋音楽学会の会員数も縮小している。また音楽演奏は、音大にいかなくてもできるし、音楽研究は音大に行かなくても可能な時代になってきた。こういった時代に、大切なものとして守るべきは、われわれの音楽研究のほうであり、われわれの大学の講座という制度でも、われわれの学会という制度でもない。塚田元会長には悪いが、時代は20年で変わっていった。おそらく支部制度を打ち立てた塚田元会長も、今なら「支部は廃止」と、そのように声を上げられることであろう。

3、定例研究会の記録

第299回定例研究会

令和6年6月2日（日）13時～16時

京都市立芸術大学伝音セミナールーム

○公開講座 大正・昭和の音とデザイン—関西と名古屋のレコード産業—
(歴史的音源所蔵機関ネットワークとの共催)

1、資料紹介とスリーブ研究の魅力

- 大久保 真利子 (九州大学総合研究博物館、西日本支部)
- 2、関西と名古屋のレーベルに見る SP レコードのスリーブデザイン
京谷 啓徳 (学習院大学文学部、非会員)
- 3、大正期のスリーブの中味を聴く
大西 秀紀 (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、西日本支部)
- 4、音で聴く地域レーベルの商法
毛利 真人 (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、非会員)
例会担当・司会 大久保 真利子 (九州大学)

傍聴記

丸山彩

レコードと聞くと、私たちはまず録音している音源に注目する。しかし、歴史的音源所蔵機関ネットワーク (レキレコ) 主催の本講座では、一般的に目が向けられるレコードの音源のみならず、スリーブ、すなわち、レコードを入れる袋にも着目した点で、レコード研究に新たな視点を投じるものである。講座冒頭に、藤田隆則氏が述べていたように、図書館は本のカバーを捨てる傾向にあることから、スリーブもレコード本体と比べて状態よく保存されていないというのは、想像に難くない。

大久保氏からは、「資料紹介とスリーブ研究の魅力」ということで、レコードの顔ともいえるスリーブ研究の概要について語られた。紙製で脆く、状態よく残っているものが少ないスリーブに史料価値を見出して、研究の俎上に載せようというのが本講座の主旨である。対象とされた史料は、九州大学総合博物館に所蔵された、映像作家・故田村悟史氏 (1940-2009) のコレクションであった SP レコード 40000 枚である。スリーブをレーベル別に分類し、デザイン毎に番号が振られた田村氏のコレクションからは、レコード会社 (レーベル) 毎のデザインの特徴が見られる。本研究で扱う関西・名古屋のレーベルの地域性としては、スリーブにバリエーションが多いのが特徴で、例えば顔写真を用いることは宣伝戦略になった。スリーブは史料として公開する方法が確立されていないため、研究対象とすることが難しく、まずスリーブにアイロンをあて、スキャンをする、といった史料の整備から取り掛かることとなる。

京谷氏からは、「関西と名古屋のレーベルに見る SP レコードのスリーブデザイン」ということで、田村氏のコレクションの中から、関西・名古屋地域の中小レーベルのスリーブ・デザインの図像学について、分類したうえで紹介された。最初に挙げられたのが、トレードマークとして各レーベルの商標を示したスリーブである。そして、中心部の円形をいかに活かすか工夫されたデザイン、音をいかに視覚化するかに意匠を凝らしたもの、さまざまな楽器も描かれた。引き札の時代から宣伝メディアには女性イメージ (美人画) が好まれたため、楽器を持つ女性 (ミュージック・エンジェルなど) も描かれた。ヌードのエロティックなイメージは、レコードの中身とも関わっている。さらに、一つのスリーブの中に日本と西洋を描き出したものも見られる。デザインのパクリは、経費節減や誤認購買を煽るといった目的もあり、人気キャラクターの無断使用も見られた。文字情報 (宣伝文) の多いデザインも関西・名古屋地域の中小レーベルの特徴であった。尼崎のバタフライのレーベルは、トレードマーク・言葉による宣伝・楽譜・円形モチーフ・エロ・女性イメージといったあらゆるイメージが盛り込まれたものであった。

大西氏からは、「大正期のスリーブの中味を聴く」ということで、大正時代に関西にあったレコード会社の歴史を概観し、特徴的な音源を聴かせていただいた。取り上げられたのは、ラクダ印オリエントレコード (東洋蓄音器株式会社・東洋蓄音器合資会社) から、復活唱歌《カチューシャの唄》 (大正3年5月・松井須磨子)、「鶯の初音」 (大正4年4月)、「京都の奉祝踊」 (大正4年11月?)、白熊印ナショナルレコード (大阪蓄音器株式会社) から唱歌《カフエーの女》 (大正4年6月・宝塚少女歌劇団)、蝶印バタフライレコード (酒井公声堂) から、端唄《二上り新内》 (大正10年、山村とよ子)、ツバメ印ニッソーレコード (日東蓄音器株式会社) から浄瑠璃《摂州合邦ヶ辻》 (大正11年2月・豊竹古鞠太夫、鶴沢清

六)、ラクダ印オリエントレコード(株式会社日本蓄音器商会京都分工場)から映画劇『船頭小唄』(大正12年7月・栗島すみ子、栗島狭衣、葛城文子)の栗島すみ子による案内(ナレーション)部分がそれぞれ流された。楽曲の演奏のみならず、鶯の鳴き声や、御大典の奉祝唄が当時ライブ録音できないためにスタジオで再現したものなど、レコードという媒体であらゆる試みがされていることが興味深い。

毛利氏からは、「音で聴く地域レーベルの商法」ということで、昭和戦前期のレコード産業について語られた。地域レーベルの生存戦略として見られるのが、スリーブ意匠にみる模倣、さらにはニセモノ歌謡・パクリ歌謡・模倣盤といったものであった。レコードの製作過程を見ると、ヒット盤を後追いで、タイトル・歌詞・楽曲の酷似したレコードが企画され、覆面歌手・寄せ集めの楽団による委託プレスが、夜店や通販において廉価で販売された。しかし、訴訟に発展しても賠償金は売上の僅かであったという。また、地域産業としてのレコードということで、中京唯一のレーベルであったアサヒ蓄音器商会(ツル印レコード)が取り上げられた。アサヒ蓄音器商会は、JOCKとのつながりから、ラジオで使用しているマイクロフォンをレコード録音にも使用することで、日本最初の電気吹き込みを行った。ツル印による描写劇『五・一五事件 血涙の法廷(海軍公判)』(昭和8年10月)は、レコード検閲の機運をつくる結果となった。

4名の講演の後、フロアを交えて活発な質疑応答が展開された。スリーブに関しては、曲名が書いているもの、スリーブの個別化していく流れがあるのか、という質問に対して、テイクとタイヘイは新譜が出ると顔写真と曲名を入れたため速報性があり、中身とスリーブが一緒になったと説明があった。また、買った人が曲名を手書きで書く例もあり、オリエントレコードには記入欄もあったという。さらに、スリーブに入れるとレコードが落ちることがあるため、上を折り返す、縦長にするとといった工夫がなかったのかという質問も挙がった。それに対しては、1900年代初頭の7インチがスタンダードであった頃はベロが付いていて、次第にベロがなくなり差し込めるようになったため、ベロがあったら不便であったかもしれないという説明があった。

会場の後部には、スリーブの展示もされ、実際にスリーブを見ることができたため、聴講者にとっても、レコードさらにはスリーブを身近に感じる機会となったのではないだろうか。今後の研究の進展を期待したい。

第300回定例研究会

令和6年7月13日(土)13時~16時

京都市立芸術大学伝音セミナールーム(日本音楽学会西日本支部例会との合同)

修士論文発表と研究発表

司会 池上 健一郎(京都市立芸術大学)

例会担当 藤田 隆則(京都市立芸術大学)

○修士論文発表「現代中国芸術歌曲の分析における新たな提案—黄自の歌曲《玫瑰三願》と《春思曲》を具体例として—」戴 旭(鹿児島国際大学大学院国際文化研究科、日本音楽学会)

傍聴記

川端 美都子

この発表は二十世紀前半に活躍した中国人作曲家である黄自の歌曲を例に、自国の言語芸術と西洋音楽的要素を組み合わせる際の作曲上の試みについて、言語の音声的特性という観点から分析する一可能性を提示するものであった。発表者によると、西洋音楽的作曲技法を用いた中国の歌曲作品研究はあまり進んでおらず、なかでも中国語の音声上の特徴である「声調」に注目した研究は存在しないという。よって、本発表では歌曲《春思曲》の歌唱旋律の動きと歌詞の声調とを照らし合わせながら作曲家の意図について探る試みがなされた。

分析の前に、発表者は中国語特有の声調である四声(音の高低に基づく四つのパターン)と轻声について実例を挙げて概説した。同じ発音を有する語でも声調に従い意味が異なるため、中国語の歌曲では旋律の高低により特定の声調が想起され、歌詞内の語の意味が異なって聞こえる可能性があるという。これを前提に《春思曲》を朗誦する際の声調が実演され、その後、歌曲内の旋律の動きと比較された。結果、同作品では概して歌詞の声調と旋律の動きは対応していたが、8箇所両者の不一致が確認められた。発表者は、その不一致が起きる箇所について、強調したい語自体においてと、強調したい語の前後の部分という2つに大別した。さらに前者では単なる不一致というだけではなく、その前後の旋律で見られたリズムや音型が繰り返されることで音楽的関連性が保たれている様も指摘した。後者では歌詞の内容や音程、歌唱法、音価などに基づいて強調したい語を同定し、意図的に当該箇所の前後で不一致が見られる可能性が示唆された。

発表では、二十世紀初頭の西洋以外の地域の作曲家が、いかに自国の文化・音楽的世界観を保持しながら西洋音楽的な技法を取り込んでいったのかを、言語的特性から分析・考察するための興味深い視点が示された。一方、分析結果については、作曲家自身の考えなどが示されていないなど根拠が充分とは言えず、説得力に欠ける印象も受けた。それを補強するためには、発表者も述べていたように、黄自による他の作品や同様に西洋で作曲を学んだ他の中国人作曲家の歌曲の作曲手法について緻密な調査・分析が必要となるだろう。今後、作曲技法を含む西洋音楽的技術や知識の習得過程を包括する近代化という脈絡も踏まえて、黄自の独創性と同時期の作曲家らとの共通性という両視点を組み込んだ研究が進んでいくことが期待される。

○修士論文発表「劉天華「国楽改進」思想の形成」陳 諾（京都大学大学院人間・環境学研究科、日本音楽学会）

傍聴記

西澤 忠志

「国楽」。この言葉は、日本音楽史研究にとっては、非常に馴染み深い言葉である。国家の「近代化」とともに目指された「国楽」。この西洋と東洋の音楽を止揚し、近代国家としてのナショナリティーを発揮する新たな「音楽」をつくりだすことが、東アジアの諸国家に共通する課題であったこと、そして「国楽」を通じて日中の音楽史を架橋できる可能性を垣間見た発表だった。

この発表の要諦は、劉天華を対象に、「西洋」音楽と「在来」の伝統音楽との「折衷」が、譜面だけでなく、楽器の変化と思想の変化を伴いつつ進んだことを証明した点にあると思われる。特に、彼の二胡の師に当たる周少梅の作品との比較は、劉の二胡の歴史における意義を具体的かつ分かりやすく説明するものだった。

その後の質疑応答では、日本の「国楽」との関係、劉天華がどのように二胡の「改良」に貢献したのか、それに伴う演奏技法の変化、劉が作品を掲載した音楽雑誌、「満州」以降の音楽史との関連についての質問があった。執筆者の関心で言えば、2点、気になることがあった。1つに、日本の「国楽」が、単に音楽だけでなく身体を含んだ「改良」だったことを考えると、「身体」の方面にも注意を向けることが、この研究をより深化させる道になるのかもしれない。次に、日本で発表された久米井敦子による劉天華を対象とした一連の研究との関係が気になった。この研究の場合、上海での体験と工尺譜をもとに「西洋音楽」とのつながりを示しており、こうした日本での先行研究との関係を示すことで、この発表の独自性がより明確になると思われた。しかしこれは、この発表の価値を損ずるものではない。「国楽」に基づく作品を、楽器と社会の変化との関係から読み解いたのは、明治時代の邦楽の「改良」や宮城道雄らの「新日本音楽」などの日本の事例でも応用可能な成果である。今後の研究においては、一国にとどまらないグローバル・ヒストリーとしての「国楽」のような、より大きな可能性を見せることを期待したい。

参考文献

久米井敦子 2018「劉天華と文明戯」『拓殖大学語学研究』137号：1-20.

研究発表「1968年から1997年の日本のポピュラー音楽における複雑なコードの変遷」
大田 星・松浦 健太・澤井 賢一・西田 紘子（九州大学大学院、日本音楽学会）

傍聴記

齋藤 桂

タイトル通り、1968年から30年間の日本のヒット曲のコードの中に「複雑なコード」がどれだけの頻度で、どのように用いられたのかを分析した発表である。

ここで言う「複雑なコード」とは、メジャー/マイナーそれぞれの7th、9th、13th系の各種テンションコードおよびサスペンデッド・コード、ディミニッシュ・コード、分数コードを指す。

対象の選出方法は次の通り。まず5年ごとの区切りをつけ、期間中にチャートインした数の多いアーティストを選ぶ。その後、そのアーティストのチャートイン曲の中で楽譜のあるものを分析対象とする。これは持続的に流行したアーティストおよび楽曲を選ぶための方法とのこと。それらを対象に「出現率の低い複雑なコード」「出現率の高い複雑なコード」、あるいは連続する3つのコードの組み合わせなど、いくつかの観点から分析を行っていた。

その結果、68年から87年まではコード進行のバリエーションが増え続けているが、88年からの5年間には決まったコード進行が多く用いられたこと。また我々は漠然と、時代とともに複雑なコードが連続して用いられる例が増えていると思いがちだが、実際には1993年~97年には前の5年間よりも減少していること等が明らかにされた。

質疑では、コード名の根拠となっている『全音歌謡曲大全集』の各巻について、そこに記されたコードがどれほど信用できるのかという疑問が出された。質問者は学生時代にその種の採譜のアルバイト経験があるそうで、採譜の現場では、テンションをどこまで捨るか等は恣意的に行われている可能性があるらしい。他にも偶成和音をどう処理するか、あるいは効果音的なものをどう考えるか等、楽譜ベースの西洋芸術音楽とはまた異なった、ポピュラー音楽を分析する際の困難さは常にあるように思われた。

他には「ヒット曲」という括りのみを設けて、ポピュラー音楽内でのジャンル分けをしないという問題もあるように思われる。たとえば1984年で分析されている「わらべ」と「芦谷雁之助」と「チェッカーズ」を同ジャンルと見なして良いのかということ、これらは作曲・アレンジのプロセスや指向が大きく異なるのではないかと。

とはいえ例えば、90年頃にsus4の使用が顕著だというような発表での指摘は、当時のヒット曲を同時代に聴いていた身からすると、確かにその時代のヒット曲の特徴を捉えているようにも感じられ、時代の雰囲気といった漠然としたものを和声から読み解く可能性もあるように思う。

歴史や背景を扱わずにチャートと出版譜のコード名のみに基づいた研究で、狭義の人文科学的な観点からは課題の多い発表かもしれないが、様々な分野や関心に接合されるテーマだろう。

研究発表「能楽の謡における裏当り（アウフタクト）の起源」藤田 隆則（京都市立芸術大学、東洋音楽学会）

傍聴記

丹羽 幸江

能のリズム体系である八拍子は、8拍半からスタートするという日本音楽のなかでも珍しい裏当たりのリズムを基本としている。八拍子は七五調の12文字をどのように8拍ひとくさりに割り振るかというリズム体系であるが、藤田氏の発表では伝統的な七五調の歌の多くは、2拍ずつの単位に4文字入るのに対し、能では3文字が入る。そのことが能での裏当たりのリズム配分の基礎にあるとする。そしてその起源を廃絶した早歌に求めるものであった。

藤田氏により早歌の上句について詳細な分析が提示された。上句の7文字での4文字・3文字(うぐいす・さそう)か、3文字・4文字(かすみ・たなびく)かの単語の文字数の構成が異なる事例の拍子当たりの検討により、3文字が重要な単位となっていることが指摘された。初期の早歌譜『宴曲集』〈春〉では、3・4文字から成る場合の3文字は、1拍2文字という早歌や広く伝統的な歌にみられる原則からはずれて、1拍1文字という渡り拍子的な拡張がなされる。一方、より時代が下った『宴曲抄』〈熊野参詣〉では、3・4文字での拍の拡張は姿を消し、4・3文字と同様に通常の1拍2文字の拍子当たりへと吸収されていくとする。早歌のリズムについては、すでに横道萬里雄による下句5文字の拍子当たりの歴史的変遷の指摘が知られるものの、上句のリズムはこれまで着手されたことはなかった。また早歌における渡り拍子的な拡張リズムは、すでに蒲生美津子氏により詳しく検討されてきたが、本発表はそれをさらに進めて、上句の3文字という、リズムの契機となる文字数の原則が提示された。早歌のリズムの研究に新しい知見をもたらしたといえるだろう。

さて、既に藤田氏は著書『能のノリと地拍子』(檜書店、2010年)において、「古式地拍子」として、「タータタ」と無限に連なるリズム・パターンが能の地拍子の「原型」であることを提示した。今回の発表は、早歌だけでなく、日本文学での「七五調四拍子説」や、小泉文夫のわらべうたのリズム、そして雅楽の高麗拍子や幕末の謡伝書『洋々集』と、視点が歌詞の3文字の文字数のリズム全般へと広がり、研究のより一層の進展を感じた。

質疑応答では、能楽の裏当たりという言葉についてだけでなく、今様やその囃子言葉について、また裏当たりの起源についての質疑があり、藤田氏の三ノ鼓、催馬楽などへ言及する応答により話題がさらに広範囲に及んだ。本発表が日本語を歌詞とする曲のリズムという日本音楽一般に共通するテーマであることを感じた。

4、定例研究会案内 (301回)

日時：未定

会場：未定

ウェブサイトでの報告をお待ちください。

お知らせ

◇支部だよりおよび定例研究会の案内の遅れについて

東洋音楽学会の2024年度は、9月に始まりしました。本年度の最初の支部だよりは、9月に刊行されるべきものでしたが、とりまとめが遅れてしまって、12月にずれこんでしまいました。前支部長としておわびもうしあげます。また、本年度の第1回目にあたる研究会は、やはり2023年度8月までの委員が責任をもって開催することになっているのですが、発表の申し込みなどがなく、まだ計画が立っていない状態です。これについても、前支部長より、お詫び申し上げます。

なお、つぎの定例研究会の案内は、基本的にウェブサイト上でおこなうことになっています。随時、ウェブサイトをご確認ください。(前支部長藤田隆則)

◇研究発表の募集

西日本支部の定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等)、発表題目、要旨(800-1000字程度)、氏名、所属支部、所属機関、

連絡先 (E-mail 等) を明記の上、下記の西日本支部事務局まで、電子メールでお申し込みください。

修論・博論の発表は、修了認定大学の所在する支部が受け付けます。修了認定大学に勤務される会員は、修論・博論発表の候補に関する情報を当該支部へお寄せくださいますようお願いいたします。

◇メールアドレスを変更されたとき

東京の本部事務所 (LEN03210@nifty.ne.jp) まで、必ずお知らせください。今後、学会全体として web を利用した会員専用サービスを充実させる計画があり、その際には電子メールの登録が必須になります。ご協力をお願いいたします。

◇東洋音楽学会の新しい連絡先

2024年度から委員が変わりました。支部長の交代にともない、連絡先も京都市立芸術大学から、国立民族学博物館 (下記、奥付) に変わりました。お知りおきください。

(本号編集担当：藤田隆則・吉岡倫裕・細野桜子)

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会西日本支部

〒565-8511 吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館福岡研究室気付
東洋音楽学会西日本支部事務局

E-mail: fkennme@gmail.com

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>